「イエス、裁判を受ける」（ルカ二二章五四～七一節）

1　大祭司の家へ

今日の聖書箇所の直ぐ前、五三節に、「闇が力を振るっている」という、とても印象深い、イエスの言葉がありました。

闇という言葉は、この後、もう一回出てきます。イエスが十字架につけられたときです。「全地は暗く」（二三・四四）なったとあります。この「暗く」なるという言葉が闇です。

闇の力は神の子イエスを十字架につけようとして働いています。その中にうごめく者たち、イエスをとらえ、死にいたらせようとする者たちについて、聖書は具体的にその名をあげています。「祭司長、律法学者、民の指導者たち」（一九・四七）、それに群衆（二二・四七）が加わっています。彼らがイエスを捕らえようと押しかけてきたことを、先週私どもは聞いています。

しかし押しかけてきたのは、そうした人たちだけではありませんでした。イエスの弟子の一人、イスカリオテのユダが、その先頭に立って、彼らを誘導して、やってきたのです。闇の力は、イエスのもっとも近くにいた者にも及んでいたと言わなければなりません。

イスカリオテのユダの名前を出すときに、福音書が決まって「一二人の一人」という言葉を枕詞のようにつけて書いているということは、すでに申し上げたことがあります。

実際そうなのです。この事実には、福音書を書いた使徒たちの、たんなる驚きだけではない、痛恨の思いが込められていました。主イエスにもっとも近いところから裏切る者が出たということ、そしてそれは、あのときの自分たちのことを考えれば、ユダとは違っていたとしても、主に最後までお従いしえなかったわれわれも、それと違わない、忸怩たる思いがあったのです。

こうした思いは、ここで、ユダのことに並べてすぐペトロのことを書いているところにも現れています。闇の力にペトロも脅かされていたのです。

> 人びとはイエスを捕らえ、引いて行き、大祭司の家に連れて入った。ペトロは遠く離れて従った。人びとが屋敷の中庭の中央に火をたいて、一緒に座っていたので、ペトロも中に混じって腰を下ろした（五四～五五節）。

ペトロを弁護するためはじめに言っておかなければならないのは、イエスが捕らえて、大祭司の館に連れて行かれたとき、じつはペトロとユダを除く、残りの一〇人の弟子たちは、みなイエスを見捨て逃げ去っていたということです。マタイとマルコにはそのことが、ちょうどこの箇所に書いてあるのですが、ルカによる福音書には出ていません。

ほかの弟子がみな蜘蛛の子を散らすようにいなくなったときも、ペトロは「遠く離れて」ではあっても、一人イエスに従って行ったのです。他の弟子はともかく、自分は最後までついていく、主をお守りする、主観的にはそう考えていた。つい数時間前

のこと、彼はイエスに、ご一緒なら牢に入っても死んでもかまいません（三三節）と語っていたことを私どもも知っています。

いまは木曜日の夜です。時刻は分かりません。最後の晩餐を済ませ、ゲッセマネでの祈りを終えてからですので、捕らえられたときは午後八時か九時頃と想像していいのではないかと思います。

じつはここからイエスは、裁判のために、四つの福音書を総合してみると、五回から六回、夜を徹して、エルサレム市内を引き回されることになります。裁判は、大きく分ければ、ユダヤの裁判と、ローマの裁判、これは政治的なと言ってもいいと思いますが、二つの裁判に分かれます。死刑執行権がユダヤには認められていなかったのでユダヤ人たちはイエスを亡き者にするためローマにまで訴え出たのです。この二段階あることをまず押さえておいていただきたいと思います。

今日の箇所は、ユダヤ国内の宗教上の裁判です。ペトロがイエスを否認するという出来事が起こったのはこの時でした。

2　ペトロの否認

大祭司の家にイエスが連れて行かれたとありましたが、大祭司がこうした裁判を取り仕切っていたからです。その館の中庭でのことです。

> ある女中が、ペトロがたき火に照らされて座っているのを目にして、じっと見つめ「この人も一緒にいました」と言った。しかし、ペトロはそれを打ち消して「わたしはあの人を知らない」と言った。少したってから、ほかの人がペトロを見て「お前もあの連中の仲間だ」と言うと、ペトロは、「いや、そうではない」と言った。一時間ほどたつと、また別の人が、「確かにこの人も一緒だった。ガリラヤの者だから」と言い張った。だが、ペトロは、「あなたの言うことは分からない」と言った（五六～六〇節）。

有名な場面です。四つの福音書とも、記述は少しずつ違っていますが、これを伝えています。

その中心にある共通点は、ペトロがイエスを知らないと言った、イエスを否認したという一事です。

いまここに他の弟子はいません。ここで起こったことを知っているのは、じつはペトロだけです。それでも、こうして詳しく伝えられているのは、ペトロ自身が語ったからです。いまや彼は初代教会の指導者、大使徒です。しかし自分の恥ずべき失敗を証ししたのです。いったんはこうして闇の力に屈したかに見えたペトロ、自分がどのようにして立ち直ったか、何が自分をいま生かしているのか、それも語りたかったに違いありません。

三度にわたる否認。この場面で一つ目立っているのは時の経過を示す言葉です。最初の否認のあと「少したってから」、二回目の問いが、他の人から発せられます。それに応答したあと「一時間ほどたつと」、三度目の問いが、また別の方面からなされています。つまり、何度も考え直す機会はあった、何度も数時間前のイエスの言葉（「今

日、鶏が鳴くまでに、三度わたしを知らないと言うだろう」三四節）を思い起こす機会はあったということです。

それに応じてペトロの否認もエスカレートしていきます。イエス個人を知らないから、仲間たちとの関係を否定し、最後は、ガリラヤからはじめてここまで一緒に歩んできた、従ってきたことを、別の言い方をすれば、自分の歩み、自分の人生そのものを否定しています。たった一時間ぐらいのことでした。彼はいわばすべてを失ってしまった。そのとき突然鶏が鳴いたのです。

まだこう言い終わらないうちに、突然鶏が鳴いた。主は振り向いて、ペトロを見つめられた。ペトロは、「今日、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」と言われた主の言葉を思い出した。そして外に出て、激しく泣いた（六〇～六二節）。

この最後の部分も、四つの福音書で、少しずつ違っています。とくに目立ったことの一つは、ルカによる福音書にだけあって、他にない言葉があることです。それが「主は振り向いて、ペトロを見つめられた」です。他の福音書は、鶏が鳴いて、それによってペトロがイエスの言葉を思い出すということになっています。そのほうがむしろ自然です。というのも、イエスはいま大祭司の家の中にいるはずで、中庭にいるペトロのもとにイエスが現れることはありませんし、仮に建物の中で振り向いても、眼差しの届くところにペトロはいなかったと思われるからです。

しかしこの「主は振り向いて、ペトロを見つめられた」という言葉は、そうした事情をこえて重要な言葉です。ペトロに眼差しを向けたのは、彼が否んだ、そのイエスご自身でした。

ペトロがイエスを否んだことは、ユダがイエスを引き渡したことと、それほど違ったことではなかったのではないでしょうか。二人とも見捨てたのです。しかしここでペトロの否んだイエスご自身が、これをうらむどころか、振り向いて憐れみの眼差しをペトロにかけて下さった。そこに赦しがあります。そこに、ペトロの弱さを、共になおうとするイエスの愛があります。それを心深く感じたペトロは、ただ外に出て号泣するしかありませんでした。そのイエスの眼差し、十字架の愛こそが、ペトロを立ち直らせたのです。

その愛がユダにも向けられていたことは言うまでもありません。しかしユダは自分のしたことを「後悔」（マタイ二七・三）はしたけれど、イエスの愛に気づいて自分を全部投げ出すということはありませんでした。

3　神の子イエス

さてイエスの裁判に戻ります。

夜が明けると、民の長老会、祭司長たちや律法学者たちが集まった。そして、イエスを最高法員に連れて出して・・・（六六節）。

すでに見たように、捕らえられたイエスは、大祭司の家に連れて行かれました。何がそこで協議されたのでしょうか。その間も、見張りの者らが、イエスを侮辱したと書いてあります（六三～六五節）。

そうこうするうち夜が明けます。協議は相当長引いたようです。方針は定まったのでしょうか。人びとはイエスを最高法院に連れ出します。

最高法院とは、ローマ時代にもうけられたユダヤの政治の中枢機関です。七十人議会ともいいます。祭司、長老、そして学者、全部で七〇人から成っていて、大祭司が議長をつとめたのです。

この夜明け直後の最高法院の開催は、マタイもマルコも言及していますが、内容は書いてありません。ただそこで、イエスをローマに訴え出ることが決められたようです（マタイ二七・一～二）。

ルカは、そこでの二、三のやりとりを伝えています。

「お前がメシアなら、そうだと言うがよい」と言った。イエスは言われた。「わたしが言っても、あなたたちは決して信じないであろう。わたしが尋ねても、決して答えないだろう。しかし、今から後、人の子は全能の神の右に座る」。そこで皆の者が、「では、お前は神の子か」と言うと、イエスは言われた。「わたしがそうだとは、あなたたちが言っている」（六七～七〇節）。

このやりとり、イエスは「わたし」と言っていますが、相手の発言はみな複数形になっています。彼ら、あるいは、あなたたち、です。大祭司個人が仕切っているのではない。必ずしも正式の裁判には見えません。とはいえ問題の中心ははっきりしています。それは、イエスの口から、自分はメシアだ、神の子だという言葉を引き出すことです。

第一にメシアというのは、旧約では、つまりこの時も、イスラエルの油注がれた王として、外敵から民を救う救世主のことです。ですからメシアと称することは、そのままローマへの反逆となります。

神の子という言葉も、最高法院は、イエスから引き出したかった。もし引き出しえたなら、イエスは自らを神と等しい者とした、神冒瀆者だと言って断罪することができたのです。

少し分かりにくいのはイエスの最後の答えです（七〇節）。「わたしがそうだとは、あなたたちが言っている」。一見すると、イエスが答えを拒んでいるようにも見えます。しかしそうではありません。「あなたがたの言う通りである」（口語訳）という意味で、はっきりした証言です。

先に弟子たちにイエスは、王や総督の前に引っ張られていくときがあっても、前もって準備をしなくていい、知恵ある言葉を、そのときわたしが与えると約束したことがあります（二一・一二以下）。イエスご自身がここでそのようにして自ら神の子と証しなさっていると受けとっていいと思います。それがやがて、いなそのまま、十字架へと通じていたとしても、御心がなるのです。すでにイエスはその道を揺るがぬ確信をもって歩みつづけています。

（二〇二一・三・七）